

談話室 第十二回

文学とは何か？

閑居小人

藤原てい著『流れる星は生きていく』(昭和二十四年)は、私が敬愛する亡き憲法学者、尾吹善人先生が倦まず若き学生に読めと伝えた本である。

口舌の徒の典型にまづ屈指すべきは法律家というものだが、尾吹先生はその著作を熟読玩味していたドイツの大法学者カール・シュミットに倣い、「文学的迫力」を重んじて、難解な文章は決して綴ることがなかった稀有の人である。おかげで私淑する不肖の弟子は弁護士になり損ねてしまったが。

藤原ていは、亡き作家、新田次郎の妻、現在文筆家として盛名を誇る数学者、藤原正彦の母である。

若き藤原一家は、昭和十八年、満州国の首都新京に渡った。夫、てい、三歳になる長男正広の「核家族」である。気象台(満州では観象台と呼ばれた)に勤務する夫には課長昇進が約束されていた。その年に次男正彦が生れ、昭和

二十年七月には長女咲子が生れた。物価は安く、外地手当も手厚く支給され、一家は新京の官舎で何不自由なく「モダンな幸福」を満喫していた。

終戦まで後六日と迫った八月九日零時、猛然とソヴィエトの大軍が国境を越えて侵攻を開始、事態は一変する。関東軍将校、満州国の高級官僚たちはいち早く脱出、「外地」の日本人は忽ち亡国の民に転落した。物語はその日の夜十時半、ふいに始まる。

《国破レテ山河アリ》

新京から無蓋貨車で鴨緑江を渡り、北朝鮮の宣川へ南下、そこで玉音放送を聞く。個人の責任で更に南下すべきか、「観象台疎開団」全体の安全を考えて踏みとどまらざるべきか、無益な議論を重ねているうち、八月二十四日、北緯三十八度線を境に、朝鮮半島は南北に分断されてしまった。後悔先に立たず、流浪の民は、以後一年間の足どめを喰う。この間、十月二十八日には、病弱者を除き、壮年の健康男子はすべて強制的にシベリヤ送りとなり、残るは女子供ばかりになって

しまった。これからは「お母さんのいうことをよく聞くんだよ、ね」と、子らの頭をなでて、夫はさよならを言った。夫を奪われた二十七歳のていは、五才の長男、二才の次男、三か月の長女を抱え、かなしみの淵に沈まされる。

よく貧窮に耐えて大陸の厳冬を越し、明くる昭和二十一年五月十五日に、日本人は「解放」された。が、それは同時に物資配給の停止をも意味していた。母子四人が生き延びる日々の糧は自力で稼ぎ出さねばならない。できなければ餓死が待っている。「今の生活には少しでも虚栄とか自惚れとかいうものがあればおしまいになってしまう」

ていは、六才になった長男に駅頭で物売りをさせるほか、じぶんは一才の娘を背たらって石鹼の行商、朝には市場に落ちた屑野菜を拾い、時に物乞いも辞さず、人形作り、温飯屋の女中もして糊口をしのいだ。「前には私はよく泣いた。しかし今は私は泣かない。戦争だ戦争だ、生きるための戦争だ」

七月、引揚の機運高まる中、

疎開団は、足手まといのいな「身軽」な人たちが脱退する形で分裂、ていは、残った本場に「困っている者同士」十八名を率い、八月一日を期して南下する。子どもたちは、既に栄養失調のため、蛙のようにお腹が突き出ている。

乗り込んだ馬糞の積もる貨車は平壤をぬけ、新幕で停止。そこから三十八度線を越えた開城までは歩くのである。八月三日の夜から決死の山越えが始まった。幼老病者が次つぎに死んでいく。ていの二人の男児も、山中の冷雨で凍死寸前の状態まで立ち至るが、近くの民家が提供してくれたお湯と藁小屋のおかげで辛うじて体温を回復する。時になけなしのお金をはたいて牛車を子どものために利用しつつ、幾多の山を越え、幾多の川を危難を犯して渡り続ける。靴を失い裸足になった、ていと三才の次男の両足にはいくつもの小石がめりこんで化膿し、腫れ上がっている。しかし、そんなことに構ってはいられない。

信州生れで元来烈しい性格のていは、男言葉で幼い男児二人に「歩け」と怒鳴りつけ、

「死にたいか」と大声で叱責し、「もうすぐだ」とはげまして、ついに、三十八度線を越え、米軍のトラックに救出されたのが八月十日の夜であった。ていの疎開団のメンバーは、もう散り散りばらになつていった。ロクに乳をもらえず成長の止まった一才の娘は、それでもなお生きる力を残している。

《かえりなんいぎ 帰去来兮》

その後、開城から議政府を経由して貨車で南下、二十一日に釜山着、翌日は博多へ出港、約二週間の海上検疫期間を経て、「内地」に上陸したのが九月十二日。幽鬼のごとき姿で子ども三人を連れてていは、貨車で博多から門司、門司から普通列車で信州上諏訪の両親の家に辿りついた所で失神してしまう。

「もうこれ以上は生きられない」

物語は、最後、この言葉で結ばれる。

十二月には夫も無事帰国、一年内には三人の子どもたちも健康をすっかり回復したが、ていの肉体的・精神的回復にはなお数年を要した。

(つづく)